惜しい庭、残念な庭

庭園文化研究分科会　　原　裕二

１．惜しい庭の存在

庭園文化研究会では、平成 22 年度(2010 年)から島根県内の庭園を視察してきた。

見事な庭を堪能できた一方で、かなり残念に思った庭や失望した庭があったことも事実である。

足立美術館や由志園、康国寺など一部の成功例は除き、全般に日本庭園はその維持に苦慮していると聞く。一般民家の庭に至っては、建築様式や生活環境の変化のためその存続さえ危ぶまれている。

そこで今回はこのような惜しい庭、残念な庭、もったいない庭を取り上げどうしたらよいかを考える。

出雲市小境町　一畑薬師庭園。団体の場合あるいは一畑薬師茶会のときに書院から見られる。

２．非公開の庭

最も残念に思う庭は、めったに見られない庭である。

本分科会では会員の個人的なつながりや所有者の御厚意で、公開されていない庭でも観賞することができた。このように自由に見ることのできない庭は、より一層興味をそそられる。

今、最も気になる庭は時節柄、出雲大社千家氏庭園である。この枯山水庭園は明治 40 年、大正天皇が御幸の際に建物とともに改修したと言われている。以前は毎年 5 月の大社大茶会の折り、書院が待合となっていたので何とか見ることができた。最近は、少なくとも平成 26 年は公開されていないようである。

松江市北堀町　明々庵赤山茶道会館。施設を借りることはできる。茶会の折りに庭に下りて観賞できたことがあった。

ずいぶん前に一度行ったことがあるが、当時はあまり関心がなかったので、記憶も画像も今ではなくなってしまった。

このほかにも観賞の許可を得ることが難しい庭がある。もう少し気軽に見ることのできる環境がほしいと考えている。

３．家屋とミスマッチな庭

庭はやはり母屋の座敷や書院、あるいはあずまや(四阿)や待合などから観賞するものであって、それ自体で存在するのは不自然である。庭だけがよいものであっても、屋敷とアンバランスであってはその価値が半減する。もちろん足立美術館や由志園のように、明らかに建物とミスマッチで生活感がないにもかかわらず集客力の高い庭園も存在する。しかしあれは一種のテーマパークのようなものであり、ここで対象としている庭とは切り離して考えるべきである。

つまり日本庭園の維持・保全は、それにふさわしい日本家屋や生活様式の継承を意味する。日本建築様式の維持というハード面だけでなく、私たちの意識改革も求められている。

津和野町　亀井氏庭園(温故館)。大変立派な庭で、建物も立派である。ミニ美術館まで備えられている。しかし人の気配がなく、いかにもさびれた印象を与える。どうやって人を呼び、活気を取り戻すかが課題である。

奥出雲町竹崎　ト蔵庭園。以前と比べて整備され、週末にそば屋も開業するが、屋敷がないのは寂しい。

江津市和木町　小川庭園。雪舟庭園と伝えられる。書院は残る。個人所有なので維持が困難だろうと推察される。

４．荒廃が進む顧みられない庭

出雲市平田町木綿街道にある本石橋家及び旧石橋酒造の庭は、町家における典型的な出雲流庭園である。こぢんまりとしたたたずまいであるが、家屋と調和的

で生活に根ざした好感の持てる庭と言える。最も好きな庭のひとつである。

本石橋家は一般公開されているものの、現在ではあまり訪れる人もなく、管理者の手で何とか手入れがされている。維持管理の予算も少なく、先行きが心配な庭である。

出雲市平田町木綿街道　本石橋家

木綿街道　旧石橋酒造庭園

５．もう一工夫ほしい庭

大変に美しく手入れが行き届いており、よい素材を持っているが、今ひとつ活気がなく惜しい庭がある。

庭を十分堪能した後は、食事及びおみやげ(買い物)となるのが一般的であろう。そのあたりの配慮がないと観光として成り立たず、リピーターも少ない。行政が管理する庭、世俗との関わりを求めず孤高を保ちたい庭などは別として、ある程度の集客力がないかぎり維持管理費用の捻出は難しい。

たとえば島根県内で最も盛況な庭園は、足立美術館である。

庭園を十分に観賞した後、日本画や陶芸をみてショップに至ると、相当な疲労感を覚える。入場料金は格段に高いが、それを感じさせない充足感がある。エンターテイメントに徹した成功例である。

足立美術館

津和野町　堀氏庭園(楽山荘)
庭の美しさに加え、建築がすばらしい。この近くにお食事処でもあれば、なおうれしい。津和野の観光資源として、強力な起爆剤になってほしい。

すばらしい庭に加えて、もう少しの付加価値がほしい。ここではあえて最もきれいで管理が行き届いている庭を例に挙げて解説する

←大田市温泉津町
　願楽寺（がんぎょうじ）庭園
御住職の御尽力ですっきりとした感じに保たれている。寺院の建築や山門の装飾、モミジの襖絵など見るべきものは多い。せめて季節の折々にイベントを開催し、集客に努めたい。

←出雲市小境町　一畑薬師庭園。
　母体の組織がしっかりしているせいか、寺や教団の行事、供養、茶会、マラソン大会に至るまで、集客能力は高い。雄大な庭園と書院のふすま絵が有名である。もうひとつ目玉商品があれば、さらに拝観者が増えると思われる。

↑吉賀町六日市　村上家（重森三玲の作庭）非公開　個人の庭では最高級の水準

←建築も伝統があって格式が高い。それでいて新しくモダンな感じがする。

益田市　小河家(重森三玲の作庭)　非公開
重要文化財級。なぜ個人でこのような庭を維持できるのか不思議である。
ここでも建築は格式があって、美しく個性的。

６．まとめ

庭は生き物であり、そこで暮らす人々の思いや生活様式、用途などが色濃く反映される。

手入れを怠り、周辺の環境と調和しないならば、立派な庭でも誠に味気ないものになる。豪華な庭でなくても、生活に根ざした現役の庭は生き生きとしており、個性あふれる趣を持っている。

現代の生活では、庭はとかく手間と金がかかるとして敬遠されがちである。今後はそのような課題に向き合いながら、この大事な遺産を後世に伝えていきたい。

７．参考文献

相賀徹夫(1979)：探訪日本の庭２山陰，小学館，18-127.
(有)グリーンフィールズ(2014)：キラリ夏号 No.31，今井印刷，12-71.